

研究プロジェクト成果報告書

研究課題 中学校における学級経営をテーマとする教員研修システムの
構築に関する実践的研究

研究期間 平成20年度～平成21年度

研究組織

研究代表者	学校教育学系 准教授	安藤 知子
研究分担者	学校教育学系 准教授	赤坂 真二
同 上	学校教育学系 准教授	末松 裕基
研究協力者	発達臨床コース	藤井 あや
同 上	学校臨床研究コース	柳澤 淳

1. 本研究の目的と課題

目的 直江津東中学校の学級経営を軸とする職員研修の取り組みを支援する形で、教員研修で活用できるツールを開発、提案する。これによって中学校における学級経営をテーマとする教員研修システムの在り方を展望することが目的である。

課題1 中学校における学級制度の現状と課題を吟味し、学級経営の今日的課題を明らかにする。そこから、校内研修のテーマとして取り上げるべき学級経営の観点や基盤となる学級の捉え方、担任の裁量範囲などの枠組みを検討する。

課題2 学級経営研修の枠組みに基づいて、研修を促進するためのツールの開発、試行、効果の検証等を実施し、研修システムの在り方を展望する。

2. 方法

課題1については、学級経営制度に関する改革動向の分析および先行研究の検討による。課題2については平成19年度に学校支援プロジェクトの一環として関わった直江津東中学校の平成20年度の取り組みに継続して関わり、学級経営研修の経過を各種の資料から整理・分析する。その際には、生徒の学級生活に対する意識の変化、学級担任教師の学級経営計画の目的や具体的手立ての変化、教職員の意識面での変化などの観点から分析を行い、平成20年度の学級経営研修の進め方や使用したツールの有効性などを総合的に考察する。

3. 直江津東中学校の取り組み

1) 職員研修の概要

直江津東中学校では、平成18年度から20年度まで、学校課題研修のテーマを「班活動を基盤とした学級づくり」として取り組んできた。その背景には、生徒指導場の問題が頻発し、基本的な生活習慣が確立していないために学習規律も成立しにくいという課題があった。平成18年度から、規律ある学校生活の確立を目指して、全教職員で学級経営の重要性を意識して取り組むことを提案し、班活動、班長会議を全校統一で実施している。

平成19年度からは、さらに、レポート・ワークショップ形式を取り入れた研修を導入し、担任教師が孤立せずお互いの学級経営について語り合う雰囲気作りが意識された。また、本学の学校支援プロジェクトチームとの共同による、アクション・リサーチ研究にも取り組み、研修の方向性の確認や、実際の研修で使用するツール「学級生活意識調査」および「実践レポート」の開発を行っている。筆者は、このプロジェクトチームの責任者として、平成19年度から学級経営研修に関わった。

平成20年度の職員研修計画では、前年度までの経緯を踏まえて、「認め合い、ともに高め合う学級集団の育成―班活動を基盤とした学級づくり―」という研究主題が設定された。具体的には、(1)班長会を核とした学級づくりの推進、(2)班活動を生かしたよりよい人間関係づくりの推進を目指して、18年度から実施している全校統一枠組みでの班活動、班長会議を継続し、生活班単位での活動の充実を検討することと、「学級生活意識調査」と「実践レポート」を活用した考察を深めることが追加されている。

平成20年度の研修の進め方は、下図のようなものである。例えば5月には、学級担任が学級経営案と「実践レポート」用紙のチェックシート部分を5月のはじめに作成し、そ

れと生徒アンケート（5月）の集計結果を資料としてワークショップを行い、研修後にレポートを作成する。同様にして、9月と1月に実践レポートと生徒アンケートの結果を資料として研修を行い、研修レポートをまとめている。3月には全体のまとめと次年度の方向性を検討する研修を行い、研修レポートを作成している。その結果、5月の段階での「学級経営案」の他、1，2，3学期の「実践レポート」と、5月、9月、1月、3月の「研修レポート」が研修資料として手元に残る取り組みとなった。

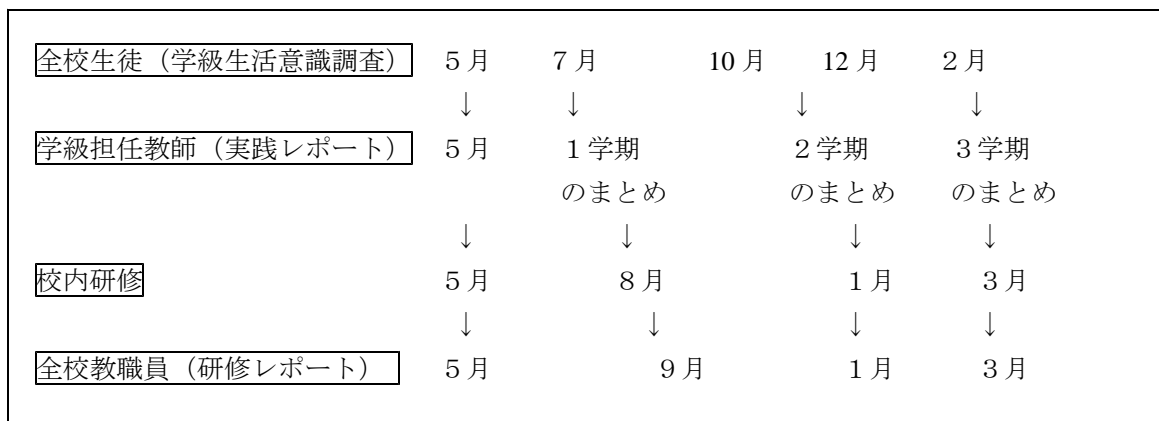


図1 生徒アンケート、実践レポート、研修レポートの相互関係

2) 生徒アンケート（学級生活意識調査）および実践レポートの内容

「学級生活意識調査」は、学級での班活動に対する生徒アンケートとして平成18年度にも実施されていたものを基盤として、班活動に対する意識のみではなく、幅広く学級での生活全般に対する意識の状態を探るような調査用紙への変更を提案した。内容は、「学級内の友人関係」「担任教師との関係」について各4項目、「学級活動への参加意欲に関する自己評価」について5項目、「学級の実態・雰囲気に関する評価」について7項目の計20項目である（資料1）。

また、平成19年度には全く自由な書式で作成されていた「実践レポート」について、プロジェクトチームが、レポートを執筆する学級担任の負担軽減と研修での意見交換を焦点化し、活性化するための契機として活用することを意識した書式を提案した。平成20年度には、この提案を基盤として研究推進委員会が修正を加えた書式が採用された。内容は、担任教師による学級の状態のチェック項目12項目（「生徒の対人関係」「学級秩序、規律に対する統制」「班活動、班長会議等に対する意欲」「担任との関係」各3項目）と、重点課題の設定、自己評価欄を共通とするものである（資料2）。

3) 生徒アンケート結果の変容と特徴

平成20年度は、生徒アンケートの結果の集計を本研究チームが担当したため、集計結果のまとめ方も直江津東中学校との打合せの中で若干変化したが、校内研修の際に各教師に提供された調査結果はおおよそ次の4点である。

- ①単純集計結果（全校、カイ2乗値による学年別有意差、学級別有意差）
- ②各学年、各クラス別単純集計結果
- ③クラス別平均値の推移の一覧表

④集計結果に対して示された第一読解のメモ（アンケート結果の概要説明）

最終的に、5回の調査結果の推移を一望する資料としては、平成20年2月の③（資料3）が提供された。これらのアンケート結果について、ほぼ共有できる傾向として3つの特徴が指摘できる。

特徴1 資料3を見る限り、学年による傾向よりも学級による差が大きく、生徒の受け止め方は学級での生活実態を反映したものであると考えられること。とはいえ、全体的に眺めると、1学年では否定的意識が年度末へ向けて高まっていくのに対して、3学年では逆に、年度末へ向かって改善が見られること（資料4参照）。ここには、1996年の片山正平の知見¹⁾と同様の傾向が現れていると見ることができる。

特徴2 対担任教師意識は、各学級ごとの平均値に大きな開きがあり、なおかつそのほかの項目との間にあまり関連性がないこと。ただし、10月に示された相関係数表の読み取りの中では、「担任を頼りにしている」という項目が、生徒自身の取り組みに対する自己評価と若干関連していることが示された。

特徴3 学級内の友人関係の様相は様々に変動していること、基本的にいずれの質問項目に対しても良好な数値を示していること、その中では比較的男女間のつきあいに課題がありそうであることなどが示された。しかし、学級活動に対する意識との関連については、あまり関連がないものと捉えられた。

4) 実践レポートの記述傾向と内容の変化

4) - 1 記述内容の特徴

「実践レポート」の記述は、学級担任教師に求められた。その記述内容の全体から見出される特徴として、2点を指摘することができる。

特徴1 基本的に個人的な記録であり、共通する記述内容ではないこと。自由記述欄には、現在の学級の状態の読み取り、生徒の反応に対する所感、今学期重点的に取り組んだこととその結果の見取り、自らの実践の反省と次学期への課題、課題達成のための具体的な手立ての試みなど、学級づくりに関連する様々な記述がある。しかし、いずれも非常に多く書き込まれ、それぞれに踏み込んだ考察や分析が展開されているといえる。

特徴2 現状の捉え方や課題の設定が大雑把であったり、抽象的であったりしてあまり多く書き込んでいない担任の記述内容は、ネガティブな現状認識があり、チェック項目の中でも「担任(自分)と生徒の関係」についての評価があまり肯定的に捉えられていない傾向が認められる。現状認識や自己肯定感があまり良好ではない時には、自らの実践をじっくりと省察し、それを踏まえて実践レポートを記述するという作業に積極的に取り組めない可能性がある。

しかし、その一方で、現状認識は必ずしも良好ではなくても、実態を率直に記述しつつ次学期の課題を再設定するような記述もある。このような記述からは、逆に実践レポートを記述しようとして実践を十分に省察することから、自己肯定感を一定程度保持しつつ現状を認識・受容し、今後の取り組み課題を見出していくことの有効性も窺われた。

1) 片山正平「学級や他者との関わりと中学生の意識変化」『鳴門生徒指導研究』第3巻,1993,pp.61-76.

4) - 2 学年別の記述傾向

基本的に個人差のある実践レポートの記述内容だが、その課題意識には学年によって一定の傾向が見られた。各学年の課題意識の変容を、チェック項目の変化と自由記述の内容から捉えると、それぞれ以下のようなものとして描くことができる。

(1) チェック項目の変化

チェック項目は、実践レポートを記述する段階で、生徒の学級での様子をどのように自己評価しているのかをチェックしておくことで、その他の記述の手がかりとすることや、生徒の学級生活意識調査の結果や他クラス担任の自己評価と照らし合わせながら、研修会の際に意見交換のきっかけとすることなどが意図された。これらの項目のチェックのつけられ方にも学年による特徴が見られた。

		5月	7月	10月	1月	3月
1 学 年	生徒の対人関係					
	秩序や規律の統制					
	学級活動に対する意欲					
	担任との関係					
2 学 年	生徒の対人関係					
	秩序や規律の統制					
	学級活動に対する意欲					
	担任との関係					
3 学 年	生徒の対人関係					
	秩序や規律の統制					
	学級活動に対する意欲					
	担任との関係					

※集計した項目のうち、⑤と⑫は逆転項目になっているのでチェックがつけられていない場合を数えた。

図2 各視点の合計チェック項目数の推移(学年別)

各教師がチェックをつけた項目の数を4つの観点ごとに合計した数を図2に示した。それぞれの視点について3項目あり、これを各学年5クラスの担任教師がチェックをしているので、全クラスで3項目とも良好であるとしてチェックがつけられていれば合計数は15となる。従って、合計数が多いほど学年全体で良好な状態が認識されており、合計数が少ないほど課題が意識されているものと考えられる。

これらの図では、1学年では年度末へ向かうに従って肯定的な評価が減少する傾向と、3学年では逆に年度末へ向かって肯定的な評価が増加する傾向があることが読み取れる。こうした変化は、生徒自身による学級生活意識調査の結果と同様の傾向を読み取ったものであると考えられる。

(2) 1学年の記述内容の変化

1学年では、年度初めの学級経営案の記述を見ると5クラスとも、学習規律や基本的な生活習慣の確立、定着を意識する記述が見られた。また、具体的な方策として「グループエンカウンター」や「ソーシャルスキルトレーニング」などの活用に言及する傾向がある。その他で共通していたのは、班活動のねらいを「話し合い活動の活用」として意識してい

た点である。表現は様々であるが、自分の意見を発言できるようになることが、生徒間での規律の形成や集団として行動するための雰囲気づくりにとって重要な課題であると考えられていることが窺われた。

【学級経営案】

<指導の重点>欄の記述

(1-1)

- ・基本的な学習規律（聞く態度、忘れ物、提出物、時間）の確立
- ・基本的な生活習慣（聞く態度、時間、服装、言葉遣い）の確立
- ・良いことはよい、悪いことは悪いと互いに言い合える雰囲気を作る。
- ・自分の意見が言える雰囲気を作るため、グループエンカウンターやP A的な活動を計画的に取り入れる。…

(1-2)

- ・学習規律の定着
- ・基本的生活習慣の定着。

(1-3)

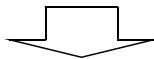
- ・学習のきまりを定着させ、授業を大切にすることを高める。
- ・中学生としての自覚と基本的生活習慣の定着。
- ・規律を守り、TPO をわきまえ、自他を尊重した言動がとれる生徒の育成。
- ・グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニングを学級活動に取り入れる。

(1-4)

- ・学習規律を定着させ、…
- ・基本的生活習慣の定着。
- ・規律を守り、TPO をわきまえ、自他を尊重した言動がとれる生徒の育成。
- ・…自己理解や他の人との意見交流を通し、集団における自分を自覚できるような支援。
- ・グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニングを学級活動に取り入れる。

(1-5)

- ・学習5か条の定着化
- ・係活動や班での話し合い活動がしっかりできるよう、支援していく。
- ・班長会議で学級の諸問題について話し合い、よりより方向へ学級を導くよう努める。
- ・グループエンカウンターやレクを通して、学級としてのつながりを強める。



<「班長会の活用」のねらいと指導の重点>

(1-2) ・学級の課題や問題点を話し合い、その改善策を考える場とする。…

(1-3) ・学級の問題点を考え、解決に向けて話し合う場とする。

(1-3) ・学級を盛り上げるために何をするか考え、実行に向けて話し合う場とする

(1-4) ・…全体のことを考えた意見を積極的に言うことができる。

(1-5) ・学級の様子を自由に話し合い、課題解決と向上に向けて取り組む場とする。

しかし、こうした年度初めの課題意識は、次第に重点を移行させている。実践レポートの記述からは、話し合い活動を重視して多く活用したが、思ったよりも生徒がきちんと活動できなかったとの実態の受け止めや、それゆえに、むしろ話し合い活動の仕方や班長の役割、行動などをきちんと指導しなければならないと感じた課題意識の変化が読み取れた。

【1学期実践レポート】

(1-2)の記述

- ・班長会において学級の課題や問題点を話し合い、改善策を考えたときに、教師に頼ろうとする姿勢が見受けられた。班長たちの意識を高め、自分たちが率先して声をかけていく意識を持てるように指導していきたい。…

- ・班での話し合い活動や全体の場面で自分の意見を言えない生徒が多く、話し合い活動が活発に進まないことが多い。班長たちに話し合いの進め方、指示の出し方を指導していくことと、学級全体に話し合いのルール、マニュアルを定着させていきたい。

(1-4)の記述

1 学期は、学級活動の中で話し合い活動を多く行った。建設的な意見を出せる生徒はいるのだが、班での話し合いになると、班長が形式どおりに進めては行くのだが、男女間で意見交換できなかつたり、一部の生徒は意見をださなかつたりしてうまく進めることができなかつた。2 学期は、学級全体で話し合いのルールを再確認し、班長たちにも話し合いの進め方やまとめ方などを丁寧に指導していきたい。…

【2 学期実践レポート】

(1-1)の記述

- ・班長会：…2 学期の後半になり、ようやく班長会の話し合いがなんだか自分達で出来るようになってきた。だが、まだまだ継続した指導が必要である。…
- ・班員：…班長の指示は素直に聞く雰囲気になった。だが、まだまだ積極性が不足しているので、話し合いや活動場面を多く設定し、自主的に行動できるように指導する必要がある。

(1-3)の記述

9～10 月：クラス内の課題を話し合い、今までどおり班ごとの目標を教室の後方に掲示した。課題の中で繰り返し出てくる項目は、「私語が多い」「離席がある」「忘れ物が多い」「不要物」である。その対策は「班長で声がけをする」。様々な意味で不十分であるが、不十分であることへの気づきを促しながら継続する予定。各班長の、リーダーとしての責任感をどう高めるかが課題である。

【3 学期実践レポート】

(1-1)の記述

- ・リーダーの育成：…こちらが思っている以上に、具体的に何をすればいいのか分かっておらず、返事だけであつたので、丁寧に、何をすればいいか具体的な行動を指導した。…
- ・クラス全体：適切な善悪の判断ができる生徒が多いのだが、それを声に出し、他に呼び掛けることに抵抗を感じる生徒が多かつた。…しかし、2, 3 人の仲の良い者同士では、前向きな声がけができていたので、その輪が少しずつ広がっていくことを期待したい。…

(1-4)の記述

班長会の取り組みについては、2 学期までは生徒たちだけに任せることができずに教師が主導になって指示を出したり、助言をしたりすることが多かつた。アンケート結果でも、「班長会で学級をよりよくするための活動がある」という項目では自分が想像していたより低い数値であつた。おそらく、周囲の生徒からすれば班長ではなく担任が主体で活動に取り組んでいるように感じさせてしまったのであろうと反省している。

3 学期は、これまでの反省と来年のことを見据えて『自分たちで行動できるリーダーを育成する』ということを目指して班長会の活動を行った。具体的な取り組みは…

(3) 2 学年の記述内容の変化

2 学年でも生活習慣や学習習慣の定着については、年度当初の課題となっている。ただし、表現としては、「家庭学習の定着」「授業規律」「授業規範」といった言葉が使用されており、学習意欲の差が生徒間に生じつつあるという現状認識と関連しているようである。学習意欲、生活態度ともに取り組む姿勢を持った生徒とできない生徒との存在が意識されたことから、学級経営案では学習・生活への積極的意欲の喚起が、「班長会の活用」では仲間や集団を考えて行動することが課題として意識されている。

【学級経営案】

<指導の重点><学級経営方針>欄の記述

※学習習慣、生活習慣等は一部省略

(2-1)

- ・基本的学習規律を定着させ…
- ・…信頼関係を築き、クラス全体で一丸となって物事に取り組めるように支援する。
- ・学校や学級での生活は個人ではなく集団生活であることを認識させ、集団として成長していこうとする態度を育てる。
- ・全員で物事に取り組む姿勢を重点として、男女とも仲の良い楽しいクラスの実現を目指す。

(2-2)

- ・何事にも積極的に取り組み、集団の一員として仲間とともに活動し、相手も自分も大切にできる生徒を育成する。
- ・自分を振り返り、向上しようとする意欲のある生徒を育成する。

(2-3)

- ・授業を大切に作る姿勢。
- ・やるべき時にはしっかりと家庭学習に取り組む態度。
- ・物事の善悪を、他人に対して指摘できる態度。

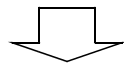
(2-4)

- ・相手の立場になって考え、行動できる生徒の育成。
- ・一人一人が責任と自覚をもって行動できるよう、係活動や清掃・給食活動の充実を図る。また、学級の問題を自分のこととして考え、解決に向けて行動できるよう、話し合い活動の充実に努める。

…

(2-5)

- ・リーダーとフォロワーが協力しあい、生徒の手による学級経営ができる集団の育成。
 - ・集団内での責任感向上に対する意識の育成。
- ◇班長会や班会議の充実を目指し、全員でこの学級を良くしていこうとする心の育成を図り、全員が学級経営に携わっていくことを認識させる。



<「班長会の活用」「班活動の活用」のねらいと指導の重点>

(2-1) ・…学級の中での自己有用感を高め、学級の団結につなげていく。

(2-2) ・学級組織の基盤づくり

(2-3) ・リーダー育成と学級雰囲気向上のための場／・仲間作り、自己成長の場

(2-4) ・集団生活のルールを考え、安心できる環境を作り上げること。

(2-5) ・「全員で学級をつくっていくんだ」という気持ちになれるよう配慮する。

しかし、実践レポートでは、「班長のリーダーシップ」と「フォロワーの育成」という形での記述が目にとまる。集団としてまとまりある学級づくりのためには、その前にリーダーとフォロワーの相互協力といった形での意識化が重要であると考えられるようになっていくことがわかる。関連して、教師の指導行動が班長のリーダーシップを育成するために、どの教師も具体的に細かく指導するというよりは、間接的にバックアップしながら班長の主体性を期待していた様子が窺われる。これは、1学年で班長の具体的な役割や行動を「きちんと指導する」必要があると考えられたのと異なっており、生徒の発達に即した課題の意識化として興味深い点である。

【1学期実践レポート】

(2-2)の記述

- ・班長の中には自分の仕事は果たせても、班員をリードすることができない生徒もいた。場面によっては班長一人が仕事を抱え込むような場面もあった。フォローする側の支援が必要であるし、2学期以降は行事等を活用しながら学級や班の一員であるという意識を高める活動を行っていかねば

ばならない。

(2-4)の記述

<反省、今後の課題>

△班長への指導が足りず、班会議や班長会議の進行・話し合いが活発に行えなかった。

→ リーダー教育をする時間確保・司会の仕方・自信をつけさせる経験を仕組む。

△級長だけが常に全体を見わたし、指示や注意をしている。

→ 班長の級長への対する依存度を下げするために、班長が発表する場を設ける。

【2学期実践レポート】

(2-1)の記述

班長会について：…後半は生徒の問題行動が多くなり、時間が取れずに班長会を充実させることができなかった。ただ、班長達の意識は前半より高くなり、言われる前に動く姿も見られた。…

3学期にむけて：一部、問題行動の見られる生徒もいるが、その生徒達を周りの生徒は冷ややかな目でみている。班長はもちろん、他の生徒も学級の一員として放っておけないという意識を育てたい。私自身も学級便りの発行数を増やすなどして生徒の良い面をアピールし、ラスト3ヶ月を充実したものにしていきたい。

(2-5)の記述

…5組のリーダーは個性が強いところがあるので、先程も記載したリーダーとフォロアーとのバランスが崩れることも考えられる。どのようにしてリーダーがみんなの考えを吸い込むか、そしてリーダーの考えをどのようにしてクラス全体におろしていくかを考えていきたい。…

【3学期実践レポート】

(2-1)の記述

…その部分を見る限りでは班長としての意識が高かったと感じた。課題としては、学級の生徒に示した提案を徹底できなかったところである。いろいろな生徒がいるので、やはり徹底するのは困難であり、それに気づくと意欲も低下する。提案した内容がいかに重要であるかを担任がしっかりフォローしなければいけないと感じた。

(2-2)の記述

・…行事や学級活動を行えば、リーダーの指示のもと協力できる生徒たちなので、日常生活にも波及するような活動を計画的に行うべきだった。

(2-3)の記述

3学期：…班長をやりたいという生徒は皆無に近く、1・2学期に班長を務めた生徒達に「また班長をやりたい」という充実感を与えさせることができなかったと反省した。反面、班長にならなくとも自分の意見が学級に反映されやすい雰囲気形成されていたのかもしれないと考えている。…

(2-4)の記述

3学期は集団のまとまりが高まっているので、新人リーダーでもフォロアーによって育つチャンス。しかし、担任による細かいバックアップできず、三年進級を意識させたリーダー指導ができずに終わった。

(4) 3学年の記述内容の変化

3学年でも、基本的に学習習慣の育成と基本的生活習慣の定着、規範意識の育成については年度当初の課題とされている。そのうえで、集団づくりに関しては、生徒全員での主体的な活動を取り入れることで主体性や積極性、集団への意識などを育成することが課題とされている傾向があった。リーダーとフォロアーの意識差を埋めることが課題であり、行事やレクなど生徒主体の活動を支援することで、こうした課題に対応していこうと考えられていたようである。

【学級経営案】

<指導の重点><学級経営方針>欄の記述

※特に集団に関する指導の重点

(3-1)

- ・お互いの良さ認め合い、思いやることができる心の育成
- ・「全員で」の活動を多く取り入れ、いろいろな人と関わり活動させる場を仕組んでいく。

(3-2)

- ・リーダーに協力できる。
- ・クラスへの所属感が持てる。
- ・誰とでも話せる人間関係

(3-3)

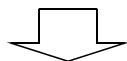
- ・生徒による自治的な活動が行える集団となるよう指導していく。
- ・リーダーや班長会を有効に活用し、リーダーとフォロアーとしての関係を機能させて活動に取り組む。

(3-4)

・…そのリーダーを中心として、課題を見つけさせ、その解決に向けて、生徒主導で取り組ませる。また、道徳や学活の時間などにも話し合い活動を取り入れ、学級全体で活動を運営しているという意識を生徒一人ひとりに持たせる。

(3-5)

- ・学級の決まりや学習集団作りにもリーダーに関わらせ、自分たちで集団を向上させる意識をもたせる。また、メンバーシップを大切にし、学級全体が活動に関心を持てるように活動を仕組んでいく。



<「班長会の活用」「班活動の活用」のねらいと指導の重点>

(3-3) 生徒からの意見・考えを吸い上げ、学級に反映させることによって、自治的な活動に対する意識を高める

(3-4) ・学級活動の企画運営 ・リーダーとしての意識の高揚 ・クラスの間関係の把握

(3-5) ・生活改善運動などを企画運営する中で、班長同士が気軽に話し合い、共通の意識を持てる関係を作る。

- ・極力生徒自身の手で活動が行えるように、適度かつ適切な支援をする。…

3 学年の場合には、生徒主体の活動を支援するという年度当初の課題が、体育祭や音楽祭、30 周年記念式典などの大きな学校行事を舞台としてうまく取り組めたようであり、2 学期以降の実践レポートは全体的に満足な成果があがったとの内容の記述が多くなっている。その中で、3 学期の実践レポートでは、どのクラスでも様々な形で誰もがリーダー、フォロアーになれる経験を仕組む方向へと実践が発展した様子が記述されている。課題意識としてはあまり大きく変容することなく、主体的な行動を育成するという方向で年間を通して取り組まれたことが窺われた。

【2 学期の実践レポート】

(3-3) の記述

今学期は体育祭・音楽祭・30 周年記念式典等、大きな学校行事が続き、生徒の活動もいっそう活発になった。その中で、リーダーとなった生徒には大きく力を伸ばした生徒もおり、成長が見られたといえる。一方で個々の伸びがそのまま集団の伸びにつながったかという点、必ずしもそうは言えない面もあった。小さな固定したグループが多くあり、その中のつながりは深まったが、クラス集団全体としてのまとまりを深めることができなかった。

…一方で学級集団としての伸びは考えていたようにはいかなかった。リーダー集団とフォロアー集団のつながりの部分がうまくいかず、集団全体としての意識が高められなかったと言える。…

(3-5) の記述

各行事を通し、さらに生徒間の仲が広がり深まったのを感じる。音楽祭では女子の中で人間関係の

トラブルもあったが、前向きに乗り越えることが出来、人間関係について考える良い機会となった生徒もいたようである。

課題としては、全員と同じ方向を向いて活動を行えない生徒が男子に数人いることと、人間関係のトラブルを繰り返し起こしているが全く成長が見られない生徒が女子に数人いることである。…

【3学期の実践レポート】

(3-2)の記述

3年生の3学期ともなれば、班編制は班長会で決めなくてももうまくいくだろう、という期待からくじ引きで行った。結果、6班あるうち5つの班はそれなりの班長が決まり、一つの班だけはなかなか決まらず、強引に決めた。メンバー構成もなかなか問題のある班であり、決まった班長も、こちらが思っていたより仕切れなくて苦勞していた。班員もフォローしてあげればいいものの、こちらが声をかけるがなかなかフォローするまではいかなかった。…

(3-3)の記述

…そして、3学期に入り、卒業間近に行った学級レクリエーションでは、リーダーの指示のもと、誰一人として勝手な行動を取らず、バスケットボールに興じる姿が見られた。…

(3-5)の記述

成果②：…最終的に男女問わず、仲が良くなったのを感じる。これは、「担任が仲を良くしてやった」のではなく、「生徒たちが自分たちで仲良くなった」と感じるのだ。これも、3年生だからということもあると思うが、ソーシャルスキルトレーニングを繰り返し行い、できる限り生徒たちに何でも自分たちでやるようにさせてきた成果だと考える。……また、学級レクを生徒任せにして繰り返し行ってきたのも良かったのではないかと考える。ただし、生徒には必ず進行状況を報告させ、確認する必要がある。

課題：…民主的な風土を築くには、それだけの仕組みが必要である。来年度には、人間関係調整力と民主的な学級の風土を計画的に築き、生徒それぞれが伸び伸びと、且つ、まわりに気を遣いながら成長できるクラスを目指したい。

5) 研修レポートの内容

研修レポートは、学級担任教師以外の教職員も全てが記述している。そのため、よりいっそう個人差の大きな記述内容となっているが、全体に共通していた点として、以下の特徴があった。

特徴1 小集団でのワークショップ形式による職員研修の感想がまず述べられていること。研修の際の話し合いから新たに得られたこと、気づいたことを書きとめる記述が多く見られた。多くの教職員が、他の教師の学級経営の様子を知り、悩みや工夫を聞くことで良い勉強の機会となっていると感じていることがうかがわれた。また、同時にワークショップの進め方に関する意見や提案も多く記述されていた。これらからは、各人がそれぞれの感じ方で研修に参加しており、主体的にその意義や課題を記述していると考えられた。

特徴2 記述内容を大きく整理すると、研修を通じての感想の他には、子どもの現状や実態に関連づけた記述も多い。研修の場での意見交換に引き続き、各人の現状に対する見方を交流するための機会として活用されていることがうかがわれた。とはいえ、一人が書く記述の分量は、5月のレポートから回を追うごとに少なくなっていく傾向があり、やはり書くことの負担感の一つの課題であると考えられた。

6) 生徒アンケートと実践レポート、研修レポートの相互関係

以上のような学年単位での課題意識の変容や、個々の教師の実践レポート、研修レポートにおける記述の蓄積からは、省察の深まりや新たな気づきを得ている様子が理解された。各教師の現状認識や課題意識は、研修会での意見交換や研修レポートのフィードバックなども関連して、全く個々別々のものとしてではなく、学年全体の傾向と関連付けられながら深まっていたと言える。

一方、「学級生活実態調査」の結果は、実践レポートの自由記述欄の中で参照されている場合が散見されたが、それはほとんどが自クラスの生徒の回答結果であった。学校全体の結果や学年の傾向などに注目する見方は、学年主任や副担任など、学級経営実践を直接行わず、側面から学級経営実践を支援する立場の教師の研修レポートに多く見られた。

例えば、具体的手立ての変更等について、より深い洞察を行っている教師は、生徒の調査結果も活用して自己評価を行っていたが、その活用は専ら「指導効果の確認」という形であった。研修レポートでの学年主任による詳細な分析・読解も、生徒の意識変容の実態を客観的な情報として捉えながら、やはり「班活動を中心とする学級経営研修の成果を現す一つの指標」と捉えているものであった。そのため、個々の担任教師の働きかけの成否を判断するものとしてではなく、現状を捉え直すものとしてこれらの客観的情報を参照し、そこから学級経営の枠組みそのものを問い直すといった「ダブルループの反省的思考」は、必ずしも十分に展開してはいなかったといえる。

なお、ここまでの分析から明らかなことは、生徒の意識調査結果の傾向と各教師の学級の状態チェックとが大きくずれることなく、同じような変化を捉えているということである。この現状認識の重なりは、各学年での共通する課題認識や具体的な手立ての重点の置かれ方に重なるものでもある。したがって、ある意味では教師間での情報交換や実践の見通しや手立ての交流が十分にできていれば、生徒アンケートという形での客観的な情報の提供はそれほど重要なものではないかもしれない。むしろ、生徒調査の結果から担任教師の働きかけの成否が判断されてしまうとすればマイナスの影響を及ぼすことも考えられる。今後生徒対象のアンケート調査等を多用する場合には、その目的や有効活用の方法も十分に検討する必要があると言えよう。

7) 直江津東中学校における学級経営研修の成果と課題

成果1 レポート・ワークショップ形式の研修の進め方に関連して

学級経営や生徒の在り方についての価値観、現状認識をめぐる相互理解の促進、メンタルヘルス維持のためのソーシャルサポートの強化、協働体制を構築するための組織風土の醸成等の面での効果はあったものと判断できる。

3月の研修レポートから：「教職員が意見交流できたことが、この研修の成果の一つである。またこの交流によって、普段の仕事の中でも相談し合う姿が増え教務室でも話が弾み心の交流ができています＝大きな成果である。」

集中講義での受講者（養護教諭）の感想：「学級経営と生徒指導や生徒の変容は大きく影響することはわかっている。しかし、じっくりと聴かせてもらう時間はほとんどなかった。また、そもそも担任特有の「個」が現れるものなので、聴いてはいけないような感覚が多少あるように感じていた。そこがオープンに示され、学べることは意義深いと考える。」

成果2 学級経営実践に関するP D C Aサイクルの機能

「実践レポート」の出発点に位置付く「学級経営案」から、「実践レポート」および「研修レポート」の記述を全て一連の思考の流れとして見たときに、個々の教師レベルでの学級経営に関するP D C Aサイクルが学期単位で細かく循環していることが窺われる。学級経営案で当初設定されていた取り組み課題やその具体的手立てが、現状認識の変化や深まりに照らして動的に変化し、「2学期に意識したこと」「3学期に取り組みでみたこと」などの形で記述されているのである。つまり、当初の経営案（P）から、1学期の実践（D）を踏まえた現状の評価や取り組みの変更が生起し（C）、また2学期の実践（A）を踏まえて現状の評価や取り組みの重点の変更を検討し（C）、3学期の実践に取り組み（A）、全体を振り返って次年度の課題に言及する（Pへ）という、大きな実践と省察の深化のサイクルがあったとみる事ができた。この点は、中学校での学級経営実践を全校的な課題にしていくというねらいに即してみれば大きな成果であったと考えられる。

成果3 提案したツールの有効性について

5月の研修レポートでは、学級を色に例えると何色かに注目したという記述が複数あり、また実践レポートの中でも5回にわたる「今の学級の色」から自らの学級経営を振り返る記述が見られた。もともと、「精神分析」をするつもりではなく、ワークショップでの会話の契機として、個人によって価値観にも差のある学級経営の理念等から話し始めるのではなく、柔らかい雰囲気ではじめられるように、という意図で入れておいた項目である。ワークショップの場に限らず、そうしたものが教務室でも職員間の話題となっていく様子からは、ちょっとした「遊び」を入れるレポートのフォーマットも有効であると考えられる。ただし、教員のレポート記述の負担軽減という意図から見れば、結果的にはあまり貢献していないように思う。レポート・ワークショップ形式での研修が軌道にのれば、むしろ全く書式自由で自らの思うところのみを記述の方が負担感は少ないのではないかと、との意見も聞かれた。課題につながる部分である。

課題 生徒の変容について

生徒の生活習慣や学習規律の確立という点での成果が見られたか否かについては、あまり楽観的な評価はできない。この点については、教職員間で「班活動、班長会議を活用する」というテーマを設定した時点で、このテーマの意図や有効性や実践上の配慮事項等について十分な共通認識が形成されていたかどうかを振り返る必要がある。班活動や班長会議の有効性を熟知し、これまでも自らの学級経営実践に取り入れて来ていた教師にとっては、こうした共通研修テーマは無理がなく、すぐに取り入れて活用することができたかもしれないが、そのノウハウを知らない教師や、むしろ学級内でのリーダー、フォロワーといった役割関係形成に否定的な考えを持っていた教師にとっては、全校で同じ足並みで実践に取り組めたわけではない。結果的には、何からどのように学級経営に生かしていけば良いのかを、ワークショップ研修で模索する段階で終わってしまったという教師も少なからずいたのではないかとと思われる。

校内での研修テーマを設定した段階で、十分な目的や意義や実践方法等についての共通認識を形成することや、そうした共通認識に基づいて、生徒に対する班長会議の進め方指導等を統一して行うことなどは、今後の課題として指摘できる部分である。

4. 本研究プロジェクトの成果と課題—アクション・リサーチの可能性と課題について

ただし、課題については、そのようにして中学校において学級経営実践の内容を全校統一の枠組みに当てはめてしまうことが妥当かどうかとも検討しなければならない。学級経営は、教師にとっては教科指導と並んで自らの教職アイデンティティの発露する最も中心的な実践場面である。これを、全校で統一した取り組みとして同じ基準で生徒に向かい合っていくことの有効性は、そうすることで教育実践の柔軟さや学校が全体として持っている人間味などの良さをそぎ落としてしまうことと表裏一体であると考ええる。

そのため、今回のアクション・リサーチでは、こうした学級経営研修のテーマを徹底させて効果を上げる方向ではなく、学級経営に対しては考え方が多様にあることを意見交流の中で自覚し、個々の教員が自らの学級経営の課題をそれぞれに意識するという方向での効果を志向した。平成 19 年度の学校支援プロジェクトの時点で、大学側チームはこのような志向性を有していたために、班活動や班長会議の活用方策を提案したり、生徒の学習規律を確立するために有効な別の方法論を提案したりするという関わり方をしないまま、「班活動を軸とする学級経営研修」というテーマを継続することになっていた。

この点は、実際には学校側から見ると、大学に対して期待したサポートとは異なっていた可能性がある。様々な学級経営の考え方、生徒指導の考え方があることをざっくりばらんに話をできる教員間の雰囲気醸成し、そこから、「隣の教室で起こっていることに関心を向け、想像しながら」自らの教室での振る舞いを自覚することが何よりも大切であると考えられるが、それは、生徒の学習規律の確立という切実な課題に対する即効薬を待っていた教師にとっては回りくどく、意味のない大学の関与であったようにも感じられたかもしれない。このような双方の見方の違い、スタンスや期待の相違等をどのように埋めていけるのかについては、まだ今後の大きな課題として残っている。

学級づくりアンケート

- 1 あなた自身のことについてお聞きします。次のそれぞれの質問について、あなたの考えに一番近い番号に○をつけてください。

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 あてはまる | 2 どちらかといえばあてはまる |
| 3 どちらかといえばあてはまらない | 4 あてはまらない |

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ① 小学校のときの友達と、中学校でも仲よくしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ② 同じ小学校だったがあまり仲よくなかった人と、中学校では仲よくしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③ 違う小学校だった人と、中学校では仲よくしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④ 違う性別の人と(男の子は女の子と、女の子は男の子と)仲よくしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤ 学級担任のことを頼りにしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑥ 学級担任に対して、不満を感じたことがありますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑦ 学級担任に対して、不満を言ったことがありますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑧ 学級担任があなたのことを理解しようとしていると感じていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑨ クラスみんなでする活動に、意欲的に取り組んでいますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑩ 自分がしなくてはならない班・係活動をやりとげようとしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑪ 班・係活動に積極的に取り組もうとしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑫ 自分がリーダー(級長・班長・教科の学習係・日直の司会など)の立場になったときに、がんばろうとしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑬ リーダー(級長・班長・教科の学習係・日直の司会など)の指示を聞いて、協力しようとしていますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

- 2 クラス全体のことについてお聞きします。次のそれぞれの質問について、あなたの考えに一番近い番号に○をつけてください。

- | | |
|----------------|--------------|
| 1 思う | 2 どちらかといえば思う |
| 3 どちらかといえば思わない | 4 思わない |

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ① クラスの仲間はみんなで仲がいいと思いますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ② クラスにまとまりがあると思いますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③ クラスのみんながそれぞれ責任を持って、班・係活動をやりとげていると思いますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④ クラス全体の班・係活動が活発に動いていると思いますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤ リーダーがそれぞれの立場でがんばっていると思いますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑥ クラス全体がリーダーに対して協力的だと思いますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑦ クラスをよりよくするための活動が行われていると思いますか。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

組 実践レポート

学級担任

1 学級の状態 現在の学級を色に例えたとしたら何色ですか

5月	淡い桃色	7月	淡い桃色	10月		12月		3月	
----	------	----	------	-----	--	-----	--	----	--

該当する項目に○

5月 7月 10月 12月 3月

① 仲良しグループにこだわらず、誰とでも仲良くできる生徒が多い。					
② リーダー（級長・班長等）と他の成員との関係が良好である。					
③ 授業中の私語を生徒同士で注意することができる。					
④ 学校生活の決まりを守らない生徒に、生徒同士で注意し合う雰囲気がある。	○	○			
⑤ 全体的に指示待ちの生徒が多い。					
⑥ 男女問わず仲のよいクラスである。	○	○			
⑦ 生徒は班活動に積極的である。	○	○			
⑧ 班長は自覚を持って行動している。		○			
⑨ 生徒たちは班長会に意義を感じている。		○			
⑩ 自分（担任）の指示が通りやすい学級である。		○			
⑪ 生徒がとりとめもない話をしにくることが良くある。	○	○			
⑫ 自分（担任）から声をかける時に、多少慎重さを必要とする生徒が多い。	○	○			

2 「班長会のねらいと指導の重点」(5月) 自己評価(5段階) 7月 10月 12月 3月

・学級の様子を自由に話し合い、課題解決と向上に向けて取り組む場とする。	4			
・正義の通る集団作りの核となる。	4			

3 「班活動のねらいと指導の重点」(5月) 自己評価(5段階) 7月 10月 12月 3月

・仲間で声を掛け合い、協力して作業する。全員で活動する。	4			
・できる限り生徒の手で仕事を行い、自分たちの学級を構成している所 属感と有能感をもつ。	4			

4 学級活動の実践例、問題や課題、自己評価結果についてのコメントなど。(7月・自由記述)

学級生活意識調査 クラス別平均値の推移(5月→7月→10月→12月→2月)

資料4

		問1① と小学 良校の 友達	② た仲 人良 とと 仲な 良か くっ	③ 人違 とう 仲小 良学 校の	④ 異性 と仲 良	⑤ 担 任を 頼 りに	⑥ こ不 と満 がを 感 じた	⑦ こ不 と満 を言 った	⑧ じし 理 解 い し よう と 感	⑨ 意 欲 的 活 動 に	⑩ や班 り・ 係 活 動 を	⑪ 積 極 的 活 動 に	⑫ ばな り た ら が ん	⑬ カ リ ー に 協	問2① 良 い な で 仲 が	② る ま と ま り が あ	③ る や 班 り・ 係 活 動 を	④ 活 発 的 活 動 が	⑤ ん り ば っ た ら が ん	⑥ カ リ ー に 協	⑦ 活 動 が 良 く す る
1 学 年 平 均	5月	1.24	1.96	1.38	2.42	1.60	1.71	1.52	1.79	1.77	1.60	1.77	1.74	1.55	1.74	1.98	1.75	1.76	1.56	1.88	1.85
	7月	1.24	1.78	1.26	2.45	1.90	2.14	1.84	1.89	1.85	1.64	1.69	1.67	1.65	1.71	1.92	1.93	1.82	1.67	1.97	1.91
	10月	1.42	1.94	1.35	2.59	2.11	2.47	2.10	2.03	1.91	1.79	1.84	1.83	1.69	1.87	2.13	2.01	1.89	1.70	2.01	1.97
	12月	1.34	1.63	1.28	2.71	2.18	2.41	1.97	2.03	1.88	1.68	1.81	1.73	1.62	1.84	2.05	2.05	1.86	1.58	1.86	1.89
	2月	1.42	1.65	1.33	2.79	2.19	2.35	2.03	2.12	1.85	1.81	1.76	1.80	1.70	1.89	2.11	2.04	1.95	1.72	1.98	1.87
2 学 年 平 均	5月	1.35	1.80	1.28	2.42	1.95	1.97	1.87	2.00	1.61	1.45	1.53	1.54	1.46	1.79	1.90	1.85	1.71	1.43	1.70	1.70
	7月	1.49	1.76	1.33	2.51	2.00	2.06	1.97	1.99	1.66	1.52	1.58	1.55	1.56	1.82	1.99	1.98	1.78	1.56	1.83	1.79
	10月	1.42	1.62	1.27	2.47	1.96	2.35	2.10	2.04	1.69	1.59	1.63	1.61	1.50	1.74	1.95	1.85	1.80	1.52	1.83	1.73
	12月	1.46	1.59	1.27	2.34	2.04	2.10	1.95	1.97	1.68	1.48	1.51	1.45	1.46	1.93	2.01	1.92	1.85	1.55	1.86	1.84
	2月	1.38	1.54	1.23	2.21	1.91	2.19	2.03	1.81	1.64	1.43	1.43	1.45	1.43	1.69	1.82	1.82	1.72	1.52	1.69	1.74
3 学 年 平 均	5月	1.69	1.94	1.34	2.62	2.03	2.08	1.65	2.08	1.98	1.83	1.92	1.83	1.77	1.80	2.06	2.04	2.03	1.62	1.87	1.93
	7月	1.59	1.81	1.39	2.43	2.28	2.35	1.87	2.16	1.84	1.63	1.76	1.72	1.62	1.80	1.99	2.05	1.96	1.61	1.80	1.89
	10月	1.44	1.80	1.31	2.41	2.08	2.54	2.25	2.03	1.78	1.62	1.64	1.66	1.52	1.74	1.99	1.84	1.80	1.48	1.76	1.84
	12月	1.44	1.60	1.26	2.28	2.15	2.43	2.04	2.06	1.79	1.59	1.67	1.65	1.58	1.78	1.94	1.84	1.79	1.55	1.81	1.76
	2月	1.35	1.54	1.21	2.10	1.99	2.45	2.15	1.92	1.64	1.47	1.52	1.56	1.48	1.54	1.77	1.74	1.69	1.43	1.68	1.66

※全ての項目で、平均値が低いほど良い傾向にあることを示している。従って、前回よりも数値が下がっている場合には肯定的な反応が増えたことを示し、数値が上がっている場合には、否定的な反応が増えたことを示します。

※問1の⑥と⑦の逆転項目は、点数を逆算して計算している。そのため他の項目と同様、低い数値ほど良い傾向であることを示します。

例) ⑥ 数値が低いほど、「担任に不満を感じたことがない」生徒が多い傾向を示します。

⑦ 数値が低いほど、「不満を言ったことがない」生徒が多い傾向を示します。

※最も肯定的評価が高い月に色をつけてある。